

## 論文の概要及び審査結果の要旨

氏名	仲山 正志
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第7号
学位授与の要件	大阪総合保育大学学位規程第13条
学位授与の日付	平成27年3月15日
学位論文題目	リズム感で育む幼児の運動能力の研究
論文審査委員	主査 玉置哲淳（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） 副査 瀧川光治（大阪総合保育大学教授・博士（教育学）） 副査 三村寛一（大阪成蹊大学教授・博士（体育学））

### 〔1〕 論文の概要

本論文の課題と方向として、1) 幼児の運動能力を育むためにどのような視点で運動能力を捉えればよいのか、更に、2) 幼児が運動能力を育むためには保育者はどのように関わっていけばよいのか、を明らかにすることを目的としている。このため、これまでの先行研究や実践を整理し幼児の運動の考え方・捉え方の類型化を試みる。この類型化を土台として幼児の運動能力を育む可能性について実証的に検討を加え、「内なるリズム」が重要な視点であることを実証的に提示することを目的とする。さらに、その結果を踏まえて、幼児の運動能力を育む運動プログラムの試案を提案することも目的としている。

まず、運動能力の実態が先行研究や実践でどうとらえているのかを検討した。幼児の運動能力の現状として、(1) 幼児の運動能力は走、跳、投とも向上している傾向であるといえるが、(2) 幼児の運動能力を発展させていくためには関連する環境、構造、評価・測定方法、運動の自己評価、運動有能感・被受容感との関連などを論じている。この多様な要因は保育・教育内容行政による把握を反映した面を持つと考えられる。これは、小学校においては、小学校43年指導要領と52年の指導要領体育目標の比較を検討して、43年の学習指導要領は「運動による教育」と呼ばれ、運動を通じて、体力、運動能力や社会的態度の育成を図ることが目標とされたこと、また、52年の学習指導要領は「運動の教育」と呼ばれ、運動の持つ特性に触れ運動を楽しむことが目標とされたこ

ととして整理をした。又、幼稚園については、39年幼稚園教育要領と平成元年教育要領の比較を行った。39年幼稚園教育要領は、幼児に対して幼児の経験や活動を組織し、あらかじめ教育の在り方を設定し、各領域が示す「ねらい」から経験や活動を保育者が選択し配列することにより、系統主義の特徴があると評価した。一方、平成元年幼稚園教育要領は、環境構成が保育者の最も重要な役割である、具体的な活動の選択と展開は、環境の関わりを通じて幼児が主体的に行うものであること、心情・意欲・態度を培うことが幼稚園教育の具体的な目標であることより、児童中心主義の特徴があると評価した。

こうした検討を通して、運動能力をとらえる枠組みとして、①系統性—主体性及び、②できる体育—楽しい体育という軸を想定することが可能と考えた。この軸で区切られた4つの区分にその内容より4つのタイプに分類することを試みた。そして、以下の命名を行った。1) 力強さ追求型

能率的、効率的に技能の獲得を図る型、2) しなやかさ追求型、運動へのイメージを持ち、自分の身体の動きと関連づける型、3) たのしさ追求型、技能の系統的な積み上げを重視するのではなく、子どもの発達や活動における楽しさを重視する型、4) こちよさ追求型、幼児の自由な活動の中から繰り返し、自発的に運動をすることで技能を高める型、である。これを整理したのが下記の表である。

表 2801 運動の類型化区分の名称		
型	名称	内 容
Ka型	力強さ追求型	保育者は子どもの身体各部分の目に見える外的な行動とその技能の系統的な指導を追求する型 投げる運動では、手や腕の動き、体重の移動を含む足のステップの動きの指導を追及する考え方
Kb型	楽しさ追求型	身体活動や技能よりも子どもの活動での楽しさを重視する型 保育者が子どもの成長に必要と考える活動に導き、楽しさに重点をおく考え方
Sb型	しなやかさ追求型	子どもが持つ身体観が土台となり、子どもの運動能力が育つという型 幼児がリラックスし、イメージを持ち、柔軟に動いているという感覚の育ちが軸となる考え方
Sa型	こちよさ追求型	子どもの自発的な身体活動を育てることをもとする型 保育者の緩やかな支援の下、幼児同士が群れる中で自発的な運動をすることにより、運動能力を高めていくという考え方。

これを踏まえて、幼児の運動の類型化により示された運動の捉え方・考え方について、それぞれ、幼児の運動能力との関連を調査することにより、各類型が幼児の運動能力を育む可能性について検証している。

①調査 I の仮説として、幼児の運動有能感・被受容感と幼児の運動能力は関

連があり、力強さ追求型により、幼児の運動能力が育む可能性がある。

②調査Ⅱの仮説として幼児の運動の好き嫌いとの幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

③調査ⅢⅣ 仮説 ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、こちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

幼児の運動能力と運動有能感・被受容感との関連（第4章）を調査した（調査Ⅰ）。調査の仮説は 幼児の運動有能感・被受容感と幼児の運動能力は関連があり、力強さ追求型により、幼児の運動能力が育む可能性があるであった。

結果は、(1) 男女とも運動能力と運動有能感「走る」に関連がみられたこと (2) 女児は、運動能力と運動有能感「スキップ」に関連がみられたことよって、仮説は一部支持された。

次に、幼児の運動能力と運動の好き嫌いとの関連（第5章）を検証した（調査Ⅱ）。調査の仮説としては、幼児の運動の好き嫌いとの幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性があるであった。その結果、幼児の運動能力と運動の好き嫌いは関連が見られなかった。よって、仮説 幼児の運動の好き嫌いとの幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性があるは支持されなかった。

こうした結果から本論文において運動能力の新たな統合視点をもとめて次のような考え方を提案している。幼児の運動類型化の内、こちよさ追求型・しなやかさ追求型が幼児の運動能力を育む可能性について検討することを目的とした。こちよさ追求型は、幼児が主体的に運動に係わることが求められる。この調査では、ステップの指導のため、週に2度、15分間、調査者が指導を行った。それ以外の時間は、幼児が自分で廊下や運動場に設置されたラダーを自由に遊んで遊びながらラダー運動を行っていた。しなやかさ追求型の内容については、幼児は、ラダーのステップを自分で確認しながら、自分のペースで運動する様子が見られた。幼児自身がラダーのステップをイメージし、運動に取り組んでいたことからしなやかさ追求型の運動の様子と捉えた。そして仮説としては、ラダー運動に取り組む、様々なステップを経験することにより、幼児の運動能力は育まれ、幼児の主体的な取り組みや、ラダーのステップをイメージして運動することから、こちよさ追求型・しなやかさ追求型は、幼児の運動能力を育む可能性があるとした。

幼児の内なるリズムについて、ラダー運動を活用し、3拍子のリズムに着目して検討を加えた。その結果、「走能力」「跳能力」共、ラダー運動との関連が認められた。ラダー運動はリズムを伴った運動である。特に走運動は質的運動能力の項目とラダー種目の項目との相関が数多くみられた。「走運動」は他の2種目と

比較して運動としての経験が多く、リズムとの関連が明確になりやすいと思われる。蒲ら（2003）は、年長児 13 名を対象にラダー運動と運動能力との関連を検討している。その結果、「ステップ操作能力と相関が認められた運動能力は、男児では「25m走」と「ソフトボール投げ」であったが女児ではなかった。」(p.22) としている。更に、ラダー運動の普及を目的とした特定非営利活動法人日本 SAQ 協会は、1998 年から 2001 年にかけて、群馬県 H 町において、町内全小学生を対象に 3 年間にわたりラダー運動に取り組んだ。その結果、50m 走、立ち幅跳び、反復横跳びに効果があったことを協会ホームページに報告している。この様に、リズムと運動能力については本研究結果と同じく、「走運動」との関連が認められている。本論文では、表 6502 より、ラダー運動によるリズムのある動きは、走運動に関連があることが示唆される結果となった。「跳運動」は「両足着地」以外はラダー運動のいずれかと関連が認められた。

さらに、これを踏まえて、ラダーによる運動プログラム実施群（実験群）とプログラム非実施群（統制群）を設定し、運動プログラムの質的運動能力との関連について検討した。宮口ら（2010 a）は、ラダー運動の実践的な効果として、主に走運動への影響を検討した結果、走運動についての効果が認められたことを報告している。本論文では、表 7502 によると、実験群は、すべての種目において有意に質的運動能力が向上したとの結果を得た。

運動プログラムが短期間（およそ 1 か月）であることを考えると成長等の要素を考えても、運動プログラムの影響により質的運動能力が向上した可能性があると思われる。効果量に注目すると、捕球（1.67）・平均台（1.29）・前転（1.01）ドリブル（0.60）の順に高かった。

さらに、調査 4 として、ラダー運動に取り組み、様々なステップを経験することにより、幼児の運動能力は育まれ、幼児の主體的な取り組みや、ラダーのステップをイメージして運動することから、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型は、幼児の運動能力を育む可能性がある。このため、調査 4 では、実験群（ラダー運動経験）・統制群（通常通り）により、仮説としてラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。この実験の方法は先行研究の方法を忠実に おって検討している。その結果表 7501 などをえている。

表7501 観察的評価における全体印象の「good」評価の割合

		走運動	跳運動	投運動	ドリブル
本論	実験群	77.3	72.9	50.6	60
	統制群	81.7	39.4	39.4	59.5
佐々木	男児	82.6	65.2	69.6	39.1
	女児	73.2	46.3	24.4	36.6

以上のことを踏まえると、内なるリズムは幼児の運動能力を育む可能性が示され、また、内なるリズムの視点は、幼児の運動能力を育むための重要な要素とすることができる可能性があるのではないかと考えたからである。よって、運動プログラムについては、4つの幼児の類型を含め、幼児の運動能力類型化Ⅱに基づいて、内なるリズムを生かす視点から再構成を行い、運動プログラムの試案の作成を行った。この試案は、投運動のプログラム試案となっている。各立場について6項目（①子どもが行う外的行動の特徴の捉え方 ②自己コントロール ③内なるリズム ④保育者による子ども理解の特徴 ⑤保育者の支援の特徴 ⑥評価）で区分し、検討を加えた。又、運動能力の育ちの具体的な試案をこれまでの参考資料を踏まえて提案している。ただし、これから実践を通して深めるべきものである。

また、内なるリズムは、運動能力の向上にどのように関与しているかについて、検討を加える必要があると考えている。そのためには、内なるリズムによる幼児の運動能力の向上の過程を詳細に観察・研究する必要がある。

## 〔2〕 審査結果の要旨

審査において、上記のないようについて説明が行われた。その上で、いくつかの質問が行われた。まず、先行研究・行政による調査など幼児の運動能力の調査を踏まえていること、又、その先行研究を4つにまとめて整理していることは評価できること、内なるリズムからの提案は重要であることを評価するとの指摘があった。

そのうえで、いくつかの質問・指摘があった。すなわち、運動能力の先行研究の評価、筆者の提起する枠組み及び統計上の処理、文部科学省の運動指針との関連・遊びとの関連はどう考えるかなど多様な指摘があった。又、タイプ分けのめいめいがしっかり根拠を持っていることが望ましい、筆者のプログラムの提案は部分であるのでプログラムの発想または軸の提案にしたほうがよいなどいくつかの修正点を指摘された。

これらの指摘や修正点についての的確な回答があった。

以上のことから、論文・面接とも博士論文として認められるとの評価を行った。よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい論文と認める。